

薬師寺東塔檨銘の研究Ⅱ

—解体修理と銘文の背景について—

研究員 廣瀬裕之、漆原徹、遠藤祐介

本論考は、武蔵野大学「しあわせ研究費」採択による上記 3 人の共同研究の成果発表であり、第 8 回目の研究論文である。「中国仏教の日本への受容」というテーマで調査を継続し書道学・歴史学・仏教学から考察を加えてきた。2017・2018・2019 年度は薬師寺の国宝「佛足石」の調査研究を 3 年間、2020・2021 年度は、国宝「佛足跡歌碑」の研究を着手、コロナ禍のため、現地での調査研究が危ぶまれたが時期を検討して訪問、この研究は 2 年間継続。2022 年度からは、国宝「東塔檨銘」の研究に着手。これらの成果は『武蔵野教育学論集』第 4・6・8・10・12・14・16 号に研究論文として発表してきた。本年度（2024）は、「東塔檨銘」の字形・書風、および、太賢撰『本願薬師経古迹』を手掛かりとして「奈良朝における薬師信仰の具体像」と、細川重賢書の木額についてを論考した。薬師寺における奈良時代の書刻の調査研究を開始して 8 年目となる。今回、研究のため薬師寺を訪れるとかつての佛足石の置かれていたお堂に掛けられていたという江戸時代の殿様である細川重賢書のとても立派な木額「佛足跡」が現存し、さらにこれを刻すために揮毫された貴重な肉筆書稿も現存するというのでこれ

を見せて頂けた。また、東塔檨銘の実物は、一昨年と昨年に引き続き間近で拝見させて頂け、感激と感謝の気持ちで一杯であった。私たちの研究論文をよくお読み頂いておられるとのことで、今回も薬師寺の応接室でいろいろな意見交換ができたことが喜びであった。ご厚意に深く感謝したい。今回、どのようにして檨銘が刻されたのかという点についてそれぞれの専門の立場から意見が 3 説に分かれた点が特筆できる。今後に期待したいと考える。

薬師寺佛足石以後にあたる中世の佛足石探しも大きな研究テーマの一つとして引き続き進めてきたが、新発見は難しかった。しかし私たちの共同研究は従来の研究を着実に前進させているといえよう。本成果は、『武蔵野教育学論集』第 18 号（2025 年 3 月刊行・武蔵野大学教育学研究所発行）に掲載した。今後も仏教を中心とした文化の研究を更に推し進めていく所存である。

▼薬師寺・事務所にて（2024 年 12 月）

